

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 真慈真雄

挿絵 しののゆら



登場人物紹介

Characters

ゆうざき あかね

結崎 茜

明るく脳天気な見習いメイド。
直情径行な楽道家で、積極的
に雪也にアプローチしていく。
性に対しても奔放。



きよさわ あおい

清沢 葵

生真面目で慎み深い見習い
メイド。典型的な委員長キ
ャラで、他の見習いメイド
たちの言行を制する。



すみかわ いぢよい
墨川 十六夜

危なっかしい三人のメイドを指導するために派遣された、メイド養成学校の教官。



こがねい みかん
小金井 蜜柑

クールで無表情な見習いメイド。見た目は無垢で幼いが、かなり毒のある性格をしている。

しろやま ゆきや
城山 雪也

両親が長期の海外赴任に行ってしまったので、1人で暮らすことになってしまった少年。他人と接するのが苦手。

実習開始

第一実習 淫乱メイドの浴室奉仕

第二実習 巨乳メイドの乳奉仕

第三実習 ロリっ子メイドの変態奉仕

第四実習 アダルトメイドの尻奉仕

第五実習 四人のメイドの乱交奉仕

実習修了、そして

007

023

064

113

157

198

248

「あはっ、ぬとぬとっ♪」

泡まみれのメイドは、そう笑うと掌を主人に見せつけた。

ぬちりっ……。ボディソープの泡と混じり合ったザーメンは、少女の掌で軟体動物のように横たわっていた。粘り気の濃い白濁汁が、幾筋もの太い粘液の糸となって垂れ下がっている。

「うわ、切れませんよ、これ……すご……」

ごくりと息を呑んで、メイドは潤んだ口調で呟いた。彼女はあやとりのような手つきで精液を弄んでいるのだが、濃密なスペルマゼリーは絡みついて指から離れようとしない。

しばらく茜はうっとりとしとりとザーメンを見つめていたが、やがて潤んだ瞳で主人を見つめた。

「……あの、御主人様……」

「な、なに？」

口調と表情から、何か面倒なことを言い出されるだろうとは思っていた。が、次に少女の口から出た言葉は、少年の理性を木っ端微塵に破壊した。

「その、あたしともっとエッチなこと……しませんか？」

「えっ……!？」

「あたし……もう我慢できないんです……御主人様のオチンチンが欲しくて……」

驚愕の余り思考が停止してしまつた雪也だったが、メイドは少年の肢体に絡みつくよう

にすがってくる。

「あたし、ずっと前から『御主人様にエッチなお仕置きをされるメイド』に憧れてたんです。……だから、お願いです。あたしにエッチなお仕置きしてください……」

もう性欲を抑えきれないらしく、茜は片手をスカートの中に差し入れ、もぞもぞと蠢かうごめせている。そこから粘液質のくちゅくちゅという音が洩れてくる。

「はあんっ……ザーメンついた指で、オナニーしちゃってます……あぁっ……」

見せつけるようにゆっくりと腰をくねらせながら、亜麻色の髪を振り乱すメイド。半分目を閉じて、うっとりとした表情を浮かべている。唇には笑みが浮かんでおり、半開きの唇を割るようにして舌を突き出していた。

「んふう……ごっ、ごしゅじんさまぁ……はやくう……」

「な、ななっ、何をすればっ……!？」

思わず反射的に聞き返してしまふ雪也。自慰以外の知識がほとんどない少年には、どうすれば女性を満足させられるのかわからない。

それを『焦らしている』と勘違いしたらしいメイドが、切なげな表情を浮かべる。

「いじわるう……御主人様は、とつてもいじわるですう……」

「いや、そうじゃなくて」

羞恥というよりは興奮からか、メイドは頬を押さえて、くねくねと身悶えしている。快

楽を切望する余り、瞳にはうつすらと涙まで浮かんでいた。

「えっ、えっと……」

積極的なおねだりに、戸惑う雪也。あやふやな知識しかない未熟な少年にとって、情欲に取り憑かれた女の子の相手は荷が重すぎる。

だが雪也としても、こんな淫靡な態度を見せつけられて、興奮しないはずがない。その証拠に、欲望の名残りを滴らせた男根は、萎えるどころか射精精以上にギンギンにみなぎっていた。

「ほらあ、御主人様あ……♪」

とうとう我慢できなくなつたのか、茜は床に寝転び、脚を大きく開いてみせた。おしゃれなデザインメイド服が床の水気を吸って濡れ、おまけにしわくちゃになつてしまいが、彼女は全く気にしていない。その結果、メイド服のミニスカートは、簡単にその内側を異性の視線に晒してしまふ。

ぬちゆうっ……。淫乱メイドの下着は、やはり淫乱そのものだった。ピンクの薄い生地で作られたパンティは、極限ギリギリまで布地をカッティングしてある。ほとんど紐に近かった。淡い亜麻色の陰毛がパンティから覗き見えるのが、ひどくいやらしい。

びっちりとしたパンティは、湯気と愛液で恥丘に貼りつき、少女の秘裂をくつきりと浮かび上がらせている。



「はあ、んう……」

悩ましげに吐息を洩らしながら、茜が太腿を擦り合わせる。縞模様のオーバーニーソックスに包まれた、無駄肉ひとつない引き締まった太腿。その健康美溢れる太腿の間で、恥丘の谷間が自在に形を変える。誘惑の言葉を囁く、淫魔の唇のようだ。

秘部だけではない。さっきの奉仕で剥き出しになっていた乳房も、雪也の視線を虜にした。水を吸って透けたブラウスを突き破るような形で、白い双丘が外気に震えている。先端の淡い色合いの乳輪を見ると、本能的に吸いつきたくなる。石鹸混じりの湯でヌラヌラと光沢を放っているバストは、豊かな包容力と淫靡な疊惑を兼ね備えていた。

（う、うわ……）

少年はごくりと固唾を呑む。眼下で悶える美少女は、普段の陽気さからは想像もつかないほどに色っぽい。純真そうな顔立ちに似合わない物憂げな瞳が、何とも言えない妖艶さを演出していた。

（な、なんだろ……頭がボーッとしてきた……）

風呂場の熱気のせいか、それとも理性が吹き飛びかけているのか。全裸の少年は、頭に血が上っているのを感じていた。心臓もドキドキしていて、全力疾走した後のようだ。

「あ、茜さん……」

かろうじて紡いだ言葉は、口の中がカラカラで上手く言えなかった。

だが淫乱メイドは、満面の笑みを浮かべて雪也を誘う。限界まで脚を開いて、その奥に息づく秘部を見せつける。白い指がゆっくりと蠢き、乙女の花園を覆う布地をめくった。ちゅくつ……ぬちゅ。内側から染み出した濃密なラヴジュースが、ねっとりとした糸を引いている。風呂場の熱気と自身の体温で上気した恥丘が、ほんのりと桜色に染まっているのが美しい。むわっと立ち上るのは、甘く濃厚なメスの匂いだ。

「御主人様あ……ここに……ここに……」

両手の指で秘裂を押し拡げながら、茜は瞳を一層潤ませた。舌足らずな口調で、甘えるように挿入をねだる。

淡い肉色の秘唇は、とろりと半透明な粘液を滴らせている。内側の襞ははみ出しておらず、陰唇の色も艶やかなピンクだ。充分すぎる愛液のせいで、つぶらなクリトリスも綺麗なスリットも、てらてらと淫靡に光沢を放っていた。

「う、うん……」

少年は痛いほどに勃起した肉茎を握りしめて、メイドの股間に膝をついた。おずおずと遠慮がちに、腰を密着させていく。

（甘い……なんて甘い匂いなんだろう）

背中を流してもらったときには気付かなかったが、発情した乙女の肉体からは甘く疊惑的な香りがした。優しく、そして切なくなるような匂いだ。

(それに、すごく柔らかい……)

太腿同士が触れ合う度に、まるで絹のハンカチで撫でられているような感触が伝わってくる。雪也は少女の腰の辺りに手をつき、彼女の脚の間に腰を割り込ませた。茜はクタリと脱力したまま、四肢を投げ出すようにして少年の瞳を見つめている。

(き、緊張するなあ……)

生まれて初めてのセックスに、期待と不安でいっぱいな雪也。とりあえず膣にペニスを挿入すればいいということは理解したが、それから先のことはさっぱりわからない。

(こ、ここかな……?)

腰を押しつけるようにして、少年は正常位のまま、不器用に挿入を試みる。淡いピンクのおしべが、濡れそぼった淫花に押し当てられた。

くちゅ……。ぬかるむ粘膜の感触が、敏感な亀頭粘膜を通じて雪也の背筋を貫く。甘くとろけるような心地よさが、快楽に飢えた男根に染み込んでいくようだ。

(き、きもちいいっ!)

一気に興奮のボルテージが上がり、少年の理性が吹き飛ぶ。性欲に突き動かされるように、雪也はグイッと腰を押しつけた。

だが、ぬらつく秘裂は童貞少年の意気込みを嘲笑うように、にゆるにゆるとペニスを滑らせる。

「あ、あれっ？」

クイッ、クイッ。焦った雪也は懸命に腰を押しつけるが、硬く勃起した肉棒は虚しく恥丘を滑るだけだ。手を添えて角度を調節してみるが、秘裂のどこが膣口なのかわからない。(どうしよう!? どうしたらいいんだ……!?)

パニックになりかけたそのとき、いきり立つ幼い勃起に優しく触れるものがあつた。茜の手だつた。優しく包み込むような手が、未成熟なペニスを導いてくれる。

「そこは、オシッコの穴ですよ……こつちに、挿れてください……」

亀頭の先端が、膣口を捉える。ヌルヌルとぬらつく肉穴が、まるで吸いつくように男性器を迎え入れてくれた。

もう何も考えることができず、ただ本能が命じるまま、少年は腰をグイッと押しつける。ぬりゅんっ！ さっきまでの苦勞が嘘のように、灼けつく肉棒は女体に侵入を果たした。震える勃起に、柔らかく繊細な肉壁が絡みついてくる。

(う、わあ……熱いっ……!)

童貞喪失最初の感覚は、驚くほどの膣の熱気だつた。熱い湯に浸したような温もりが、ペニス全体を包み込んでいる。

「ああ……御主人様……んっ！」

結果としてさんざん焦らされてしまった茜が、待ち望んだ挿入に過敏な反応を見せる。

びくつと肩を震わせ、主人の脚に自分の脚を絡みつかせてきた。必然的に、二人の腰は深く密着し、ペニスはより深く挿入される。

「う……………つく……………！」

先端から根元まで、ねっとりとした温かい秘肉が肉茎を包んでくる。淫欲に彩られた膣壁は、括約筋の複雑な締めつけでオスの生殖器官を奥へと誘う。その決してオスを逃がすまいとする貪欲な動きが、雪也の心を虜にしまった。

(中で……………中で誰かがしごいてるみたい……………)

腰をとろかすような甘い快楽のせいで、少年は細い腰を震わせたまま動くことができないう。身じろぎするだけで幹に無数の褻が絡みつき、我慢しきれないほどの刺激を送り込んでくるのだ。

雪也は年上の少女をギュッと抱き締め、しばらく荒い息を吐いていた。気持ちよすぎて、動くことができない。それに、もっと彼女の温もりを感じていたかった。

「御主人様……………動いて……………うごいてえ……………」

挿入感だけでは満足できないメイド娘が、うわずった声で浅ましい欲求を口にする。口で言うより自ら動いた方が早いと思っただのか、腰を上下に揺らすようにして、ピストン運動を始めた。

ぬつ……………ちゆうつ……………くぼつ……………んちゆううつ……………。密着した腰と腰の間で、粘り気の

濃い水音が洩れ出す。

「あっ！ あうっ！」

雪也は悲鳴をあげて、何とか腰を動かすまいとした。もたらされる快感が大きすぎて、ペニスが痛いほどに痺れる。稚拙な自慰しか知らない少年にとって、女陰は余りにも甘美な魔物だった。身体の奥まで吸い出されるような錯覚に、頭がボーッととなってしまう。

「う、くうっ……だっ、だめっ……うごか……ないでっ……！」

今にも暴走してしまいそうになる勃起を、雪也は下腹に力を込めながら抑えつけようとする。さつき射精したばかりだというのに、早くも射精感が迫ってきた。じわじわと上昇してくる熱い奔流が、睾丸からペニスの根元、そして先端へと這い上がってくる。

「ああんっ、焦らさないでくださいさあいっ！」

情欲ですっかりとろけてしまったメイドが、甘い声で不満を洩らす。茜は少し腰を浮かせるようにすると、自ら積極的に腰を振り始めた。

ちゅくっ、ぬちよんっ、ちゅぷっ！ さつきより激しい音が溢れ出し、少年に自分が性交していることを思い知らせる。

もつとも、雪也はそれどころではない。暴発寸前の肉茎は、熱い柔肉のうねりの中で狂おしげに身悶えしている。少女が腰をくねらせる度に、微細な襲がペニスをくすぐり、しごき上げ、吸い尽くす。

そんな少年の耳に、茜の唇が寄せられる。淫欲に酔った甘酸っぱい声が、耳元で囁いた。「御主人様……一緒に、気持ちよくなりましょう……」

そう言うのと、メイドは主人の真つ赤な耳朵をレロリと舐めくすぐった。

「うっ!？」

くすぐったさと共に誘惑の囁きが脳内に流れ込み、少年を狂わせる。

「ね? 動いて、くださあい……」

「う、うん……」

小悪魔の囁きは蠱惑的で、とても抗^{あらが}える気がしなかった。かすれる声で答えると、雪也は恐る恐る、腰を動かしてみた。

ずにゆるうっ……。とろけるように柔らかい膣壁が、幾重にも絡みついてくる。熱く濡れた粘膜は微かにざらついていて、ペニスはズキズキと快楽に疼いた。

「ああんっ♪」

甲高い少女の嬌声が、濡れた唇からほとばしる。抱き締めていた白い肢体が跳ね、少年の肩を抱き締めてきた。

(茜さんも、気持ちよくなってるんだ!)

自分の行為が、相手にも快楽をもたらしている。それはちよっぴり、雪也の自信を取り戻してくれた。

(よし、それなら、こうして……っ！)

最初の猛烈な波は過ぎ去り、今はいきなり射精してしまう心配はなさそうだ。少年は思い切って、膣内のペニスを前後に動かしてみた。

にゅぷっ、くぶんっ、ちゅくっ！

「ひゃあんっ！　そ、そうですっ、それ気持ちいいっ！」

メイドが叫びながら、脚を突っ張らせてのけぞる。それと同時に膣が収縮し、無数の驀が男根に密着してきた。

(うわ、す、すご……)

ほんのりと桜色に上気した女体の肌、甘い吐息、うねる蜜壺。どれも童貞少年には刺激が強すぎ、雪也は完全に肉欲に吞まれてしまう。

(もっと、もっとこの子の恥ずかしい姿が見たい！)

快感を貪るだけでは飽きたらず、雪也は茜の痴態見たさに抽送を開始する。最初はゆっくりと確かめるように、そして次第に速く。

ちゅっ、ちゅぽっ、ぬぷっ、にゅぷんっ！

「はあっ、はっ……はっ、はあっ……！」

不器用で稚拙だが、少年の腰遣いは激しい。とにかく腰を動かせば、それだけで甘酸っぱい心地よさを味わうことができるのだ。乾いた砂が水を吸うように、性欲はどこまでも

快楽を要求する。

「すっかり本能の下僕となって、雪也はぬらつく肉壺に男根を抜き差しした。腰を押しつけて根元まで蜜肉を蹂躪し、時には腰を引いて膣壁にペニスをしごかせる。

じゅぽつ、ちゅぶつ、ぐちゅうつ、ぬちゅんつ！ 激しいピストンに、組み敷いたメイドが甘い嬌声をあげる。茜は頬を染めながら、唇に手を添えるようにして指を軽く噛んでいた。それがまた、何とも従順で愛らしい。

「ひゃうつ、ああんつ！ ごつ、ごしゅじんさま、すごつ……すごいつ……！」
(やば……これ、病みつきになる……)

まさにセックスを覚えたサルそのものと化して、雪也は異性を犯し続けた。眼下では愛らしい美少女メイドが、自分の性器で身悶えしている。

「きもちっ……んっ……いいのっ……？」

「はっ……はいっ……とつても、んうっ!? きつ、きもちっ……いいあつ！」

よほど感じているらしく、茜は腰をくねらせながら、うわごとのように呟く。挿入される快感だけでは物足りないのか、泡だらけの乳首を自らつねりつつ、舌を突き出して甲高い悲鳴をあげていた。

本来なら活動的で愛らしい半袖のメイド服。オシャレな北欧風メイド服は、ずぶ濡れになっていた。湯を吸ったスカートは茜の下肢に貼りつき、彼女の細い腰のラインを浮き上



がらせている。飛び散った白い泡が、まるでザーメンのようだ。

濡れた白いブラウスは、くつきりと肌の色と形を透けさせており、脱いでいるのと同じ、いやそれ以上に淫猥な印象を与えていた。泡だらけの胸元からは、清潔な石鹸の香りと、甘酸っぱい汗の匂い。

いつもならヒラヒラとりボンのように華麗に舞うエプロンの帯も、今は水を吸って彼女の身体に絡みついていてる。それがまた、被虐的な雰囲気を生み出していた。

(うわー……いやらしいな……)

白い果実を掌で揉み潰しながら、浅ましく悶えるメイド少女。普段が快活なだけに、今の彼女は何かとても卑猥な存在に見える。だが決して、それは不快な印象ではない。むしろ女の子の秘密を垣間見たような気がして、雪也はドキドキしていた。

——中に出したら……ダメだ。

学校の授業で習った『男の人の精子が女の人の卵子に出会うと、受精卵が子宮に着床して赤ちゃんができる』という知識がフラッシュバックし、少年は何とかがして肉棒の暴発を食い止めようとする。

「ちよ、ちよ待っ……も、うわっ！」

「ああ……もつと、もつとお……御主人様の、熱くていいよお……」

「制止の声をあげた雪也だが、茜もペニスも待ってくれなかった。発情した媚肉の繊細で

淫靡な蠢きが、ぞくぞくするほど気持ちいい。陰囊から湧き起こる熱いうねりが、潤んだ肉壁にくるまれた勃起を突き上げる。

——出るっ！

そう思った瞬間、少年の視界は真っ白に染め上げられた。

「うっ、うううう~~~~~~~~っ！　くうあっ、ああああっ!!」

びゅくんっ！　びゅくっ、どくどくんっ！　どぶうっ！

二度目の射精を、今度は女体の奥で迎える少年。柔らかく熱い粘膜にしごかれ、童貞ペニスは狂ったように子種汁を膣中に放出した。

（あ、ああ……出しちゃった……女の子の膣に……精液を……）

何の心構えもなく大人への階段を上ってしまった雪也だったが、それにもかかわらず、射精の快感はとてつもなく大きかった。自慰では決して得られなかった、不思議な満足感。それが『セックスの快感』であることには、少年はまだ気付いていない。

初めての膣内射精に震える雪也は、腰を奥まで押し込み、ペニスを膣の奥深くに挿入する。生殖本能に命じられるまま、少年は思う存分に精子を子宮内に送り込んでいた。

（と、とまらない……まだまだ出る……）

どくんっ！　どびゅうっ！　びゅるっ！　我慢に我慢を重ねたせいか、ザーメンの放出は延々と続く。終わることのない快楽に雪也はいつまでも酔いしれていた。

「え？」

聞き返すよりも早く、メイドたちが胸をはだけながら迫ってきた。少女たちの可憐な手が、雪也の肢体に絡みつく。

れるんっ！ 生暖かく柔らかい舌が、少年の玉袋を舐め上げる。腰がゾクリと震える快感に、男根はヒクヒクと震えた。

「ん……はむ……んふ……臭くて変な味ね……」

主人の脚の間に入り込み、頬ずりするようにして陰囊を頬張っているのは、蜜柑だった。醒めた口調とは裏腹に、舌遣いは熱心で情熱的だ。幼い舌がチロチロと陰囊の表面を這い回り、性感帯に微妙な刺激を与えてくる。精巣に小さな菌が触れると、切ない痺れが胸を高鳴らせた。

「小金井さんもお上手ですわね。でも、夜の御奉仕の特訓をした私も、負けていませんわ」
葵は自信たっぷりと言うと、エプロンとブラウスを半分脱ぎ、ブラジャーを外す。白くたわわに実った甘い果実が、ポロンとまろび出た。

この年頃の乙女だけが持つ、繊細で優美な曲線。そしてこの年頃の乙女には似つかわしくない、圧倒的なポリウム。清楚な顔立ちとのアンバランスな雰囲気、何とも卑猥で美しかった。

「普段は重いんですけど……ふふっ、こういうときには便利ですわね」

巨乳メイドは自らの乳房を軽くこね回し、胸の谷間を寄せる。たっぷりとローションを垂らしてぬめらせると、肉の果実は蜜に濡れたようにヌラヌラと光沢を放った。汗と混ざり合った透明な粘液が、双丘の狭間でヌチヨヌチヨと糸を引く。塗りつけられたローションの一部は、硬く尖った乳首の先端から、長い糸を引いて垂れた。

「では、失礼いたしました……っと」

葵はバストを抱きかかえながら、手つかずになっっている主人の逸物を挟み込んだ。ローションでぬらつく双球が、猛る男根を柔らかく包み込む。

ぬちゅう……。灼けた肉棒に、ひんやりと冷たいローションと乳肌の感触。ぬめった果肉はとろけるように柔らかく、ペニスをすっぽりと根元まで隙間なく覆う。

眼鏡メイドは溢れるほどの巨乳を両脇から支えて、ゆっくりと上下運動を開始した。

ぬちゅう……。ちゅばん。にちっ……。ちゅばん。怒張の表面をきめ細かい柔肌が撫で、亀頭のエラを丁寧にしごき上げる。むにむにと弾力のある乳房は、濡れた腔のように温かく柔らかかった。

「いかがですか、御主人様？」

「あ……。いいよ、葵さん……。うっ……。はあ……」

陰囊をちびっこメイドに舐めくすぐられ、陰茎を巨乳メイドにパイズリされ、少年は息を切らして呟く。二人がかりの奉仕は下半身全体を包み込むようで、たまらない満足感を

与えてくれた。

更に葵は、舌を伸ばして雪也の腹筋をなぞるように舐め上げた。くすぐったさと同時に切ない心地よさが走り、少年は悲鳴をあげてしまう。

「ひゃうっ!? ちょ、ちよっと、少し休ま——」

「おっと、まだまだですよっ」

茜がクスクス笑いながら、横合いから首を突っ込んできた。親友の胸の谷間に顔を埋めると、そこから垣間見える亀頭に熱いキスをする。

ちゅっ。ローションまみれの勃起が、柔らかい口唇を貫いて、舌端の洗礼を受ける。滑らかな触感の乳房とは違い、舌はざらついて自在に動き回る。尿道の中にまで舌端が差し込まれ、ペニスの内側をくすぐられた。痛みにも似た激しい快感が生じ、視界が明滅する。

「はっ! くはあっ! うお、おふうっ!」

陰囊から陰茎の幹、それにペニスの先端まで、三種三様の技巧を凝らした愛撫が展開される。一度に複数の性感帯を刺激され、下腹からゾクゾクと興奮が湧き上がった。

「あら、大丈夫ですか?」

倒れかけた主人を背後から支えたのは、十六夜だった。教官メイドはさわさわと少年の胸板をくすぐりながら、耳朶を甘噛みする。その手つきは優しく、そして容赦なく、雪也の衣服を脱がせていく。たちまちのうちに、少年は全裸にされてしまった。

「あ、ちよつと……くっ、くすぐりたいよ……ああんっ！」

雪也は抵抗しようとしたが、下半身をメイド三人に好き放題奉仕されているので、力が入らない。おまけに、少年の唇が不意に柔らかいもので塞がれた。肩越しに押しつけられた、十六夜の唇だった。

「ん……むう……ん、んう……っ」

大人の女性との接吻は、とろけるような甘さだった。すぐにメイドの舌が雪也の唇を押しつけて侵入してきて、更に歯列をこじ開ける。一人の舌は軟体動物のように絡み合い、唾液を掻き混ぜ合う。

濃密なディープキスはいつ果てるともなく続き、少年は意識が薄れてきた。だが股間から送られてくる快感はそれ以上に濃密で、とても意識を失ってなどいられない。

蜜柑の玉舐めによって精巣から送り出されたザーメンは、葵のパイズリで幹の中を駆け上がり、茜のフェラチオによって尿道口から洩れようとしている。雪也は本能的に射精を堪えようと下腹に力を込めているのだが、三人がかりの巧みな奉仕を受けては、もうどうしようもない。

ずくん、ずくん、ずくっ、ずくっ、ずくずくずく……。ペニスを震わす脈動は次第に性急になっていき、耐えがたいほどの衝動を生み出していた。亀頭の先端からは際限なくカウパー液が溢れ出しており、全身から熱い汗がにじみ出してくる。胸の鼓動は張り裂

けそうだ。

その間にも、三人の美少女メイドたちは献身的に奉仕を続ける。三人の唾液と汗の匂いが混じり合い、オスの本能を刺激する芳香となつて立ち上る。柔らかな乙女の肌とメイド服は熱を帯び、触れる度に少年の心をときめかせた。

「ん、む……んう……ぷはあっ」

長い長いディープリキスを楽しんだ後で、ようやく十六夜は主人の唇を解放した。ぬらつく唾液が舌と舌の間にきらめき、てろんと垂れて少年の顎を濡らす。

「はあっ、はあっ、はっ……あうっ！ くうっ！」

「うふふ、可愛い旦那様」

教官メイドは目を細めて、もう一度少年の唇に接吻した。それから彼女も、集団フェラに参加する。茜と一緒になつて、亀頭を舐め始めたのだ。

「あっ、先生つてばズルイですっ」

「あら？ 御主人様の独り占めはいけないわよ」

教官メイドとお気楽メイドは競い合うように、舌を絡めて雪也のペニスを舐めくすぐる。四人のメイドたちが織りなす、贅沢な奉仕。舌と乳房の愛撫が激しくなり、次第に少年の性感は高まっていく。

ちろちろちろちろっ……。ゴスロリメイドの小さな舌端が、陰囊のシワのひとつひとつ

までを舐め尽くし、丹念にくすぐる。

ぬちゅん、にちゅっ、ぬちゅんっ。巨乳メイドの豊満な乳房が、狂おしく脈動するペニスの幹を甘く擦りたてる。

ちゅっ、ちゅうっ、ちゆるるっ！ 教官メイドと脳天気メイドの可憐な唇が、先走りの液を洩らす亀頭に接吻し、尿道をカラにしようとして吸い上げる。

男根の周囲を隙間なく舌と乳房で覆い尽くされ、のけぞりながら雪也は震える。

「うわっ、くうううっ！ すごっ、すごいよっ！ おかしくなりそううっ！」

メイドたちが争うようにペニスを奪い合うせいで、少年の逸物は休まることなく快感責めに晒される。幾つもの舌が下腹から陰茎、陰囊に至るまで舐めまわし、バストが幹をしごき続ける。限界間近の男根が、悶えるように激しく脈打っていた。

「あら？ 御主人様、亀頭がヒクヒクなさってますわよ。そろそろ射精なさいますか？」

「んっ、もぐう……んぶっ、そろそろ出る？ なら、こうしてあげるわ」

小さな唇で陰囊を頬張っていた蜜柑が、葵の言葉に反応した。頬張った玉袋のシワを舌で引き伸ばし、更には精巢を舌で転がし始めたのだ。それに茜も続く。

「んじゃアタシも頑張っちゃおっ！ 葵ちゃんも、しっかりしごいてねっ！」

ねろねろねろねろんっ！ 十六夜と茜が舌端で、亀頭を集中的に責め始めた。エラをなぞり、亀頭の裏側を徹底的に舐め上げる。葵も同時に、乳房の上下動を小刻みに速めた。

透明なローションが白く泡立つ。

「んっ！　ぐうっ!?　うああっ！」

魂まで弄ばれているような快感に、少年の勃起がズクンと脈打つ。根元から尿道を伝って、熱い塊がこみ上げてきた。四人がかりの激しい責めに、ペニスは爆発寸前だった。

「ほらほら、イッチャってください♪」

茜が小悪魔のようにクスクス笑って、亀頭の先端をざらりと舐め上げた瞬間。

「あっ、あっ!?　ひいひいいうあああっ！　あっ、うあああああ——っ!?」

びゅ——っ!!　びゆる——っ!!　びゅくっ、びゆるるる——っ!!

物凄い勢いで白いマグマが尿道を駆け上がる。括約筋の抵抗を一瞬で突破して、精液が亀頭の先から放たれた。

「きゃっ！　すごっ……」

葵の悲鳴が聞こえた気がするが、白濁の快感が、それをすぐに記憶の彼方へと流してしまった。今までのどんなオナニー、どんなセックスよりも、射精の快感は激しい。男根が吹き飛ぶかと思うほどの、猛烈な衝撃が全身を貫く。

(死ぬ……っ、こんなに気持ちよかったら死んじゃうっ!!)

射精が生み出す余りの心地よさに、身体が勝手にガクガクと跳ねた。何か叫んだようだったが、自分では覚えていない。



噴き出した精液は、そのまま四人のメイド娘たちに降り注いだ。

「きゃあんっ、熱いですうっ♪」

「あらあら……旦那様、こんなにたくさん……」

噴水のような白濁液は、まず真っ先に茜と十六夜の唇を汚し、更にその頬や額や前髪をドロドロにしてしまう。茜の北欧風メイド服に、ゼリー状の精液塊がべっとりと貼りつき、エプロンにも大きな染みを作った。

飛び散ったザーメンは葵の巨乳も真っ白に染め上げ、胸の谷間に大きな白濁湖を作る。隙間からこぼれた白濁汁は、白く清潔なブラウスの胸元へと滑り落ちていった。

「やだ、汚い……」

眼鏡っ娘メイドの胸の隙間から滝のように流れ落ちた精液は、真下にいた蜜柑の顔にも降り注ぐ。幼い顔立ちは粘つく子種汁でねとねとに汚れ、彼女のゴスロリメイド服のあちこちに白い染みを残した。メイドキャップに、白濁液の糸が垂れ落ちる。

びゅくんっ！　びゆる、びゅっ！　びゅびゅっ！　びゅっ……びゅくっ。びゅっ。

呆れるほどの量のスペルマを放出して、ようやく射精が終わった。

「は——っ……はっ……は——っ……はっ……は——っ……」

獣のように荒い息を吐きながら、全てを放出し終えた少年はフラリと脱力する。もうとても、立ってなどいられなかった。十六夜がしつかり抱き締めていてくれなかったら、そ

のまま頭から倒れ込んでいたに違いない。

「ふわぁ……すごい量ですね」

脳天気メイドが呆気にとられたように、唇に貼りついた精液の塊を舌で舐め取った。口中で味を確かめるようににもごもごさせた後、喉を鳴らして飲み込んでしまう。そして『にばっ』と笑顔を見せた。

「あは、すっごく濃くて喉に絡んで……おいしいです♪」

葵はそれを聞いて、胸の谷間に溜まった白濁液を、掌ですくい取って口に運ぶ。目を閉じてゼリー状のスペルマをすすり、ゴクゴクと呑み干した。白い喉が上下に動き、食道を精液が滑り落ちていくのがわかる。

「熱い……こんなにたくさん……」

巨乳メイドが陶醉した声で呟くと、ゴスロリメイドも流れ落ちてきたザーメンを求める。葵の胸の谷間に小さな唇を寄せ、垂れてきた白濁の糸を音を立ててすすった。

「んっ……んく……んむっ……」

こくんと喉を鳴らしてから、蜜柑は軽蔑したように呟く。

「なにこれ。臭くて不味いわ」

だがそう言いながらも、ツインテール少女は精液をぺちャぺちャと舐め続けている。ぬるう……っ。葵が乳房を解放すると、まだピンピンに怒張した逸物が、虚空にそそり

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>